Osaka University Knowledge Archive

Title	阪倉先生を圍んで
Author(s)	山口, 正男
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 130-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90436
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

が配られる。一人で持つと少し重いので、兩側の人に助けられて頂く。味は又格別でおいしい。各所に笑いの聲が聞えてなごやかな空氣に包まれる。

この後關西學院の齊藤先生の説明で、金堂や巨大な大塔の礎石、靈寶館の佛像、舍利塔等を見學して、石塔で有名な般若寺に向った。

阪倉先生を圍んで

昭和四十一年二月十三日　京都吉田阪倉先生邸に於て

出席者　阪倉篤太郎先生
中川幸三　酒井全太郎
藤塚誠二　山口正男

山口正男編

中川　始めてお出まし願いましたのは、昭和八年でしたか。

先生　えゝそうです。始めは古事記で、濟んでから枕草子、それから萬葉になりました。萬葉は大分前から續いておりました。一からずっと始めて十二位までゞ半分位です。

中川　木曜日は盛んでしたね。先生の時は春からでしたね。漢學史をやっておられた大江先生とご一緒じゃなかったですか。

先生　いや一緒じゃなかったです。週二回でした。二階の書庫のところでやりました二三年續いたと思います。

中川　大江先生が亡くなられてから、先生ばかりでしたね。その時分は世の中も落付かんので、五六人位か十人までに止まりましたけど——

先生　そうそう、ひどい時はもう三人位でした。

中川　戰災の荒果てた部屋で感心しましたね先生……

先生　感心しましたね。よう續いたと思います昭和八年からですから。戰爭で燒けてから假事務所が建ちましたな。私は昭和二十三年頃まで行ったように思います。

それですっかり止めになりましたな。本も皆大阪大學へ行ってしまったしね。

中川　先生あれでもう定日講義のしまいになりましたね。其後は春秋二回になりました。やはり皆さんも定日講義の復活を希望しておりますのですがね。あれでなければ、ほんとうの懐德堂の趣意などの實現が不可能と思いますね。春秋二回ではね。やはりきまったテーマで續いてもらうという事が、一番大事なことだと思いますね。

先生　ご承知の通り私は大阪生れで、大阪へ週に一回行くのが却って樂しみでしてね。いつも夜の講義を晝から行くのです。學校の講義が濟むと、晝から出かけて行って、本屋をひやかしたりなどしてね。

中川　本屋の方は昔なら京都のようにいきませんけれど、大阪は大分此の頃、よくなりましたね。先生また歩いていたゞけるところがあるのですがね。大學は……

先生　大學は東京です。

中川　中學校は――

先生　大阪です。

中川　高等學校は――

先生　京都です。丁度燒けた日でしたな。私行ったのは。

酒井　十三日の晩ですよ燒けたのは。

先生　そうそう、だから十四日です。私の講義は。丁度木曜でした。それでねやられたとゆうことは知っていましたが、京都ではっきり分らんでしょう。なに、されてると思って行ったのですが、天滿橋へ降りたら何も無いんでしょう。電車は無いし、とにかく歩いて見ようと思って、松屋町筋を懐德堂まで歩いたですわ。そしたら未だあちこち燃えていましたがね。まだ大丈夫だろうと思って堂まで行って見たらそしたら何んにも無い。

中川　まだ燃えてましたか。

先生　まだ燃えていました。電線などもそのへんに一杯でして恐かったです。歸りも仕方なく、又天滿橋まで歩きましてね。着いたら又えらい人でね。枚方邊へ歸る人でね。それでも仕方なく天神橋まで又歩き、そこから電車に乘りました。えらい思い出でした。實際びっくりしました。あゝいう光景は私、懐德堂へ通っている間の一番の悲劇でしたね。

中川　此の間生駒の石切に參りました。そこにその邊の寺田とゆう舊家なんですけれど、ずっと行きますと隅に懐德堂の(學)という瓦が置いてありましたから、これは昔のか、大正の頃のかと尋ねますと、いやこれはつい此の間つぶした懐德堂というところのもので、石も、燒

けた門柱も、表札も内にあるとの事なのです。懷德堂のそばの博物場の石と、昔の燒けた堂舍の階段の石とかを全部持って來ているのです。藤塚さんの書いた懷德堂記念會の表札も、焦げた門柱もあるのです。石はこれだけでなく、石切神社の横手にも未だ置いてあるのです。それで寫眞を撮って來たのですが――、そして土地の同じような家の方に尋ねますと、寺田さんは元府廳えも勤められた方で、石材にも關係があったので、石の方の處分も引受けられた關係で集まっているのだろうとの事でした。その大正の建物の石垣、瓦は今ではもう記念品になってしまっていますね。府廳へ勤めておられていたによるにしても、ひと所に纏まっているのは一寸面白いと思います。

先生　せめてその表札だけでもほしいですな。瓦だけでも……

藤塚　懷德堂の跡は今住宅公團に關係した事務所が出來ているね。

中川　先生、然し書庫だけは殘っています。これは賣渡したものですが、火に堪えて殘っています。

酒井　北側の土塀は一部殘っていますよ。

中川　講義には女の方も多かったね。

先生　女の人がちよいちよい來てましたな。お醫者さんの奥さんがいましたね。

藤塚　濱地さんの奥さんでしょう。

先生　習いに來ていた人で、やはり堂友會へお顔を出されますか。

酒井　たまにです。

中川　いま頃は中々寄る機會が少のうなりました。定日講義にですとね、週に一回は――

先生　よう甘酒を……（一同笑聲）

中川　甘酒會ね。あの甘酒會は辛黨の西村先生のご發案で――今も昔も同じ事と思いますが、やはり今まで懷德堂でやっていたゞいた樣な古典の定日の講義が、一日も早く復活していたゞかないと困りますな。

先生　出來んと困りますな。やはり便利のところでないといけませんね。

中川　聽講生の中で、南久太郎町の東堀突當ったところの濱側で若干の土地があって、懷德堂が定日講義をするとかであれは寄付するという方があるのですが、九十坪あるということです。一體に記念會のほうは資金難でしようね。昔は懷德堂五同志という具合で、聽講者も皆財力がよかったのですがね。そうなりますと昔の時世も有難いものですが、永田仁助さんという方などは、やはり大阪の人だけで、熱の入れ方も違ったのだろうと思

いますが、しみじみ永田さんの有難味が、分りますね。西村先生、内藤先生、狩野先生などの先生方以外に、永田さんという人がいられて懷德堂が維持出來たのですね。

先生　わたしらが知ってからでも、たくさん亡くなられましたね。懷德堂の先生がたで――

中川　狩野先生はご長命でしたけれどね。わりかた懷德堂關係の先生方はご短命でしたね。六十臺が多いですね。

酒井　先生、失禮ですがおいくつになられますか。

先生　わたしは滿が八十六です。あしかけ今年八十七です。私の父は七十八位でなくなりました。

中川　先生はお父さん似ですね。わたしたち小學校へ通っている時分に、夏の朝早いと表へ椅子を持ち出しておられてね、先生のお父さんはいつも新聞を讀んでおられました。先生のお孫さんもご立派になられて……この頃ご令息の本もよく出ているようですな。

先生　えゝ。東京の聖心女子大學に轉任することになりました。四月から。家がなくて困っております。今狩野の家に一緒におります。

中川　早く懷德堂の復活ということになって、先生にもお遊びに來ていたゞくということになると宜しいのですがね。記念會の方でも色々お骨を折って基金のほうも充實して、事業の、復活ということをお考えになっていたゞいておるようですがね。

先生　一たん無くなると、むづかしいですな……あとへ殘すということは。再建というか、もう一ぺん復活するという事は中々むづかしいですな。

中川　一つの機運というか、チャンスというのがあって、人文會から懷德堂重建という風に、何かやはり色々な要素があって――

酒井　今年の五十年記念祭時分に、そういう機運が盛りあがれば宜しいですね。

中川　今、適塾でお祭をいたしておるのを、五十年記念には阪大の講堂でも拜借して執り行なおうかということを、一寸漏れ伺ったのですが、先生お天氣も宜しうございましたら、是非まげてご出席を……。

先生　えゝその時分になったら、もう行けるだろうと思います。

中川　吉田先生とは中學でご一緒だったのですね。精神科の和田先生もご一緒でしたか、今お達者ですか。

先生　さあ和田さんはどうですかね。

中川　左近司という海軍の將官がいられましたね。先生とたしかご一緒だったと思いますがね。水交社名簿に

のっていますね。中學の同級というともう少ないでしようね。

先生　私と同級という者はもう殆んどおりませんでしようね。中學の同級は二十人あまりいましたのですがね。懷德堂へ稽古に來ていた人のうちで、田中重太郎とゆう人がいましたが、私の講義も聽いたそうですが、今大阪の相愛大學にお勤めですが、時々會いますけれど、あの方はまだほんとにお若い時分に懷德堂に行っていました。

中川　朝日の古典全集の中に校本が出ていますね。

先生　枕草子の專門家ですね。

中川　大高におられた關係で、懷德堂の定日講義とか、定期講演を聽かれたとゆう方で、もう一角の教授になっておられる外山さんとか、竹中さんとか、もう學位をとっておられる方もあり、世代の變ったことがつくづく感ぜられますね。

先生　田中さんはもうその時分には枕草子を研究されていたのではないですかね。丁度私の枕草子の時間に來ていましたから。懷德堂の五十年というのは……。

藤塚　講義始めてから五十年でして、懷德堂記念會というのは大正二年頃に出來ておるので、それから建築したりする間がありました。講義を始めて五十年になります。

先生　私が行くようになったのは、それから大分あとですね。

藤塚　え、そうでございます。

先生　林先生は私の先生なんです。三高でね。

中川　先生の先生になりますか……。

先生　丈夫な人でしたがね。胃癌でなくなられました。陸軍少尉でね。

中川　雨の日なんか長靴を履いてね。天滿橋からずっと歩いて來られた。電車なんかに乘られずにね。健康上ね……。

先生　私もいつも天滿橋から歩いて行きました。私歩くのが好きでね。此頃足がこうなりましたが、前は歩くのが好きでね、隨分歩きました。少々電車があっても乘らずに。そのお蔭で達者なんかも知れません。晝早くから行って、心齊橋やら千日前も歩きました。

（終）